

改革者の図書室

閉ざされた中国大陸からの声

中国への幻想を打ち砕く

竹のカーテンに閉ざされた隣国である中国大陸の实情を把握することは、なかなか容易なことではない。それは外観と中味、宣伝と実情、表面と裏面、見本と実物が余りにもかけ離れすぎているからである。

そのもっともよい例が日本のマスコミや訪中団によって紹介されている中国は、まるで天国か極楽のように手放しで礼讃されている。これに対し中国大陸からの難民を多く擁している香港から紹介される中国は、まさに悲惨なる生地獄である。特に、毎日大陸から生命がけて脱出してくる難民たちの言によるといっそうその感が強いのである。

特定の人のみによる短期間の訪中団が、中国側のお膳立によって参観用の陳列品のみ見せられて語る中国像よりも、大陸内部でのきびしい生活体験を経てきた難民たち

入江通雅編

『ニクソン訪中後の日中』

を読んで

原書 房刊
定価六百五十円

根^ね本^{もと}宏^{ひろし}

(中国問題研究窓)

の語る赤裸々な中国に、より信頼性をおくことができるのは筆者のみではあるまい。

このように余りにもゆがんだ中国像が、日本では大手をふってまかり通っているのである。特にニクソンの訪中決定のニュースは、これらに一段と拍車をかけバラ色の夢を託した虚像はますますふくれあがる一方である。

その時期にこの虚像の仮面をはぎとり、

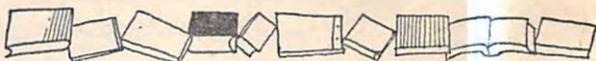
バラ色の幻想を打砕いて、中国の实情に焦点をあわせ、日中間のきびしい現実を目を向け、警鐘を乱打しているのが、今回出版された『ニクソン訪中後の日本』と題する一書である。

従来 中国関係の報道や論評の殆んど大部分が、中国側の意志を代弁するにあらざれば、ウヤムヤな論議でお茶をにごしてきたが、この本こそは日本の自主独立の立場にたつて、日本人の真の良識を代表した正義正論ともいふべきで、「相手を知り、己を知り、置かれた環境を知り、本質を知り、本流を知る」うえにおいて、各界、国民必読の書として座右に備へて頂きたいと思ふのである。

闘争と弾圧のパターン

特定の日本人による皮相的な中国訪問談にはいささか食傷気味の読者のために、中国大陸から小さな漁船で、生命ながら香港に脱出してきた難民(かつての紅衛兵)の語る大陸の实情の一端を次に紹介してみよう。

……僕は現在(香港で)内体労働をやっていますが、故郷(大陸)に居た



ナ戦略の転換」を経て六九年九月十月を転期に大きく修正されはじめた経緯が分析され、この過程で「中ソの雷とけ」つまりソ連を指し非難の回避という微妙な変化が生じ、反ソ路線の後退があったと著者は見る。同時に、今日の中国が示すような「国際復讐戦略」が定着しはじめたのであり、この過程こそ、周恩来そして黄永勝・総参謀長らのリーダーシップが確立してゆく過程であった。

第二章「文革後の指導体制」は、以上のような対外政策の変化をもたらした国内指導体制の分析であり、「文革派の凋落」、「軍の政治進出」、「周・黄ライン」抬頭の背景が詳細にあとづけられている。今日の中国国内での、異変は、このような背景に映してみても、その深刻な意味が推察できるのである。

第三章「脱毛沢東化」は、文革によって絶対的な権威を確立したかに見られた毛・林体制が、いまや徐々にくずれはじめ、「劉少奇なき劉少奇路線」と見られる現実主義が復帰しつつあること、中国経済の現実と諸矛盾、文化面における様々な危機が

指摘されている。

そして、第四章「文革と毛沢東主義」は、以上のような変化こそ毛沢東の影響力の後退ではないかとして、すでに非毛沢東化がはかられつつあることを事実に基づいて指摘し、文革の理念が挫折した経過を見事に証明している。

*

以上のような内容をもつ本書は、わが國に支配的な「毛沢東神話」に憑かれた人びとから見れば、きわめて挑発的かもしれぬ。この点を著者は、「毛沢東不可謬論」に基づく「毛沢東神話」が、日本の中国論に大きな影響を及ぼしている。それは中国のすべての動きを毛沢東において把握しようとするからである」と述べているが、たしかに、今日の中国の動向は、「毛沢東神話」に依拠するかぎり、解明できないことばかりであろう。

あれほどの激動と犠牲を払って毛・林体制を固めたのに、なぜ林彪が「消息不明」なのか？ なぜ、文革を指導した人物が次々に消えてしまうのか？ われわれは、い

まこそ、文革とはなんであったのかを、改めて考えてみなければならぬ。その点で本書は、今日の中国の眞の姿を理解するうえで不可欠な著作であろう。

日本のマスコミやジャーナリズムは、大變、無責任で、昨日まで社説で一つの説を述べていたのに、ひとたび中国への特派員派遣が決まると、昨日までの立場をかなぐりすてて変節するといふ昨今である。また、毛沢東と劉少奇の対立は絶対であり得ない、とか、林彪が米中接近をはかった主役である、とか、毛・林体制は揺がず、とか、米中対決から米中戦争へ、とか、米中ピンポン外交は人民外交として存在しても、米中の国家レベルでの接近はあり得ない、などといっていた無定見な「中国通」があいかわらず時流に便乗し得る世の中である。

その意味でも私は、本書を大いに推奨したいと思う。

東京外国語大学助教

なか 嶋 嶺 雄

「毛沢東神話」を破る

画期的現状分析

柴田 穂著「周恩来の時代」

中央公論社刊・定価五百八十円

情況のなかであらわれた画期的な現状分析論である。画期的というのには、著者が、「まえがき」に述べているように、わが国には「文革の收拾と、文革後の中国の現状について解明した著作は、ほとんどないと云ってよい」からでもあるが、毛・林体制の強化・確立という俗説を正面から打破し得る分析力と説得性によって本書ができていっているからである。

*

中国の国連参加がいに表現した。喬冠華・中国首席代表の国連初演説は、予想されたとおり、中国の原則的主張を披瀝したものであったが、そこには、国際社会へ本格的に参加しはじめた中国の並々ならぬ意欲がうかがわれた。それはまた、文革後の中国が周恩来のリーダーシップのもとにすすめてきた中国の積極外交の意味を十分に示すものであった。

だが、ここで注意すべきことは、今日の中国が、文革の勝利のうえに、文革の理念と成果を吸収して、今日の対外政策を打ち出してきているのではない、という問題である。むしろ、文革の帰結を公式に確認した九全大会路線の大幅な修正のうえに今日の中国は存在しているといえるのである。

このことは、一見、理解しがたいようにも思われるが、最近の中国国内に見られる様々な異変、毛沢東の後継者として明文化された林彪をはじめ陳伯達、康生など文革を担い、推進した指導者の相次ぐ「消息不明」、再建された党委員会の「脱文革化」状況など、中国の情勢を冷静に分析すれば、きわめて明白な事実なのである。

ただ、今日のわが国を蔽う「中国傾斜」の競争合戦のなかでは、このような明白な事実さえ十分に語られず、報ぜられないだけなのである。ここに、中国ブームのなかでの中国にたいする「思考停止」、「分析回避」という情況が存在していることはいうまでもない。

柴田氏の『周恩来の時代』は、そうした

本書は、著者が過去三年間、『中央公論』その他の雑誌に発表し、その都度、注目を浴びた論文を再構成し、数多くの新しい事実や最新情報を折り込んで一冊にまとめたものである。第一章「周恩来外交」、第二章「文革後の指導体制」、第三章「脱毛沢東化」、第四章「文革と毛沢東主義」の四つの章から成り、資料として、今日の中国を知るうえで必要な要人略歴や基本文献も収められている。

第一章「周恩来外交は、九全大会（一九六九年四月）の林彪政治報告に見られるような反米反ソ強硬路線が中国の「インドシ

能の人士とのあいだにこそ、真のきびしい対立と格闘があつたのだと、前記王堂の説は暗示しているわけである。

この王堂の方程式は史上多くの「保守対革新」的みせかけの対立劇の真相を分析するにあつて、はなはだ有力かつ啓蒙的である。たとえば十六、七世紀の欧州経済界において、重商、重農両主義の経済政策があたかも保守対革新の対立劇よろしくくみずはぐれつやりあつてゐるうちに、時代はこの両説をおいてけぼりにして、レッセ・フェールこそもっとも健全の解決策とする時代へととつたとお先きに失礼していた。ということさらには次のようなことも暗示している。重農といふ重商主義といふ、それらのイデオロギイがうまれたときには、むしろそこに生じた新しい時勢への具体的改造策として建築されたものに違ひないのだが、やがてそれが一般化されて大衆の所有となるほどに時間が経過した後においては、常に時勢に適切の様式からは二歩も三歩も立ちおくれたものになつてゐるといふこと。少数の識者の発見が多数のものになるまでのさげがたい時間の経過とその間における時代の進化と時勢内容の変化によつて、それは常にさげがたいといふこと。したがつていつの時代どこの国でも、あたかも国論を二分するようなはなはだなしさで争われる保守と進歩との対立劇は、実はいつでも両者とも、相当時勢におくれたしろものになつてゐるとい

うこと。真に時代に適切な改革者は、いつでも極少数者にかぎられるだらうといふことをも、同時に鋭く暗示するものであろう。眞實生活に必要な知識が民衆の所有とならず、民衆の共有するものはいつても相当の着古しであり廃品であるといふ眞知と民衆とのすれ違ひの悲喜劇は、大抵このあたりに胚胎して生れる。

なぜこのようなイデオと現実とののはなはだしいズレが生ずるかの理由はきわめて簡明である。すなわち時運の歩みは一刻もとどまつておらず、それに適切な改善策といわれれるものは、常に一種の応急対策たることがさげがたいからである。いや、診断と処方適切かつ有効であればあるだけ、その最初の一服の注射はすでに対象たる患者の病状を多少でも変更してゐるはずで、すでに第二服目におなし薬を同量に用いることの不適当なることは、あたかも医者か病人に対するときのようなものである。きのうの眞理は決してそのまま今日も眞理であるはずはなく、この世に不変のものはない得ないからである。この一点からも教条主義は、どのような教条主義もすでに適者生存のこの世における生存不適者たり敗北者たることがわかる。同書において王堂は、この間のことを次のように喝破している。——昨年正しかったことを今年もくりかえしている者は悪人である——と。